

公立中高一貫校入選(入試)概況

◎ 公立中高一貫校では、正式には入試とは呼ばず、行政に合わせて「入学者選抜(略して入選)」という用語を使用していて、「受験」ではなく「受検(検査を受ける)」という用語を用いています。

◆ 東京都

東京都の公立中高一貫校は11校で、11校合計の応募者数は、一昨年、昨年と減少し、8,215名になりましたが、今年も7,906名と減少が続きました。コロナ禍もあって安全志向が強く、高倍率が敬遠につながっているのでしょう。東京都教育委員会は、中高一貫校で高校募集を行っていた白鷗高附属、両国高附属、大泉高附属、富士高附属、武蔵高附属について段階的に高校募集停止・完全一貫化と中学段階での定員を拡大する方針で、昨年は富士高附属と武蔵高附属が、今年は両国高附属と大泉高附属の募集定員が拡大されています。白鷗高附属は来年度定員拡大の見込みです。

まず区立の九段中等から。同校は応募枠が区分A(千代田区民枠)と区分B(千代田区民外枠)に分かれています。区分Aは一昨年が女子の応募者が増加して男子が前年並み、昨年は男女とも減っていて、今年は逆に男女とも増えました。区分Bは、一昨年は男子が前年並み、女子がやや減っていて、昨年は男女とも減少、今年は男女とも昨年並みです。区分Aは男女とも少し難化したようです。区分Bは男子が昨年並みの難度だったようですが、女子は欠席が増えてやや入り易くなったかもしれません。

続いて23区の都立です。白鷗高附属は帰国・外国人枠、伝統文化の特別枠、一般枠の3本立てです。帰国・外国人枠は、今年は女子が昨年と同じ応募者数、男子は減っています。伝統文化の特別枠は男女合計では昨年と同じ応募者数です。どちらも性格上、難度のコメントは控えます。この記事の最後に内訳を載せました。一般枠はこのところ男女とも応募者が減少傾向で、今年も減っています。今年は検査Ⅲの実施時間が延長されました。男女とも実質倍率がやや緩和していますが、入り易くなる水準ではありません。小石川中等の特別枠は、今年は女子1名だけの応募でした。小規模な選抜ですから難度のコメントは控えます。同校も一般枠

は一昨年、昨年と男女とも応募者が減っていて、今年も減りました。安全志向を反映しての結果です。同校も実質倍率は緩和しましたが、まだ高倍率校ですから入り易くなったとは言えません。

両国高附属は、一昨年は男子の応募者が若干減って女子は増加、昨年は男子がやや増えて女子は少し減っていました。今年は男子が微減、女子が減っています。定員が拡大したこともあって、実質倍率は低下、少し入り易くなったようです。桜修館は一昨年、男子の応募者が前年並み、女子はやや減っていて、昨年は男子が増えて女子は一昨年並みでした。今年は男女とも減っています。高倍率敬遠でしょう。実質倍率は少し緩和しましたが、入り易くなるほどではありません。

大泉高附属は一昨年、男子の応募者が減少、女子は若干増加、昨年は男子が増加、女子は減っていました。今年は男子が小幅ですが男女とも増加しました。同校は募集定員拡大なので、期待した受検生が多かったようです。ただ、募集定員拡大の影響が大きく、実質倍率は低下、少し入り易くなったかもしれません。富士高附属は、一昨年は男子の応募者が増加、女子も若干増えていて、昨年は男女とも減っていました。今年は男女とも増えていて、女子の増加が目立ちました。昨年は定員拡大でも応募者が減っていて、入り易くなっていましたから、期待した受検生が多かったようですが、今年は男女とも少し難化したようです。

多摩地区も見えます。三鷹中等は、一昨年、昨年と男子は小幅だったものの男女とも応募者が減っていましたが、今年は男女とも応募者が増えました。男子が小幅なのは変わっていません。男女とも実質倍率は上がっていますが、男子は小幅ですから難度はあまり影響がないようです。女子は少し難化したようです。武蔵高附属は、一昨年は男子の応募者が目立って減少、女子も少し減っていて、昨年は男子が増加、女子は減少が続きました。今年は男子が減って女子が増えてい

ます。昨年は定員拡大で男女とも少し入り易くなっていましたが、今年の男子は応募者が減ったことでやや入り易くなったかもしれません。女子は実質倍率が上がっていますが、一昨年よりは低い水準で、やや難化したかどうか、といったところでしょう。

立川国際は帰国・外国人枠と一般枠の2本立てです。帰国・外国人枠の応募者数は一昨年は小幅ですが増加、昨年はやや減っていて、今年は男子がやや増えて女子が減っています。性格上、難度のコメントは控えます。一般枠は、一昨年は男子が前年並みの応募者数、女子は増えていて、昨年は男子がやや増加、女子は減りました。今年は男女とも増加しています。実質倍率は上がり、少し難化したようです。南多摩中等の応募者数は、一昨年、昨年と男女とも減少が続き、今年も減っています。高倍率への敬遠でしょう。実質倍率は男女とも緩和しましたが、入り易くなるほどではなかったようです。

ところで、毎年合格者の中で入学を辞退するケースがありますが、今年の都立各校では小石川中等の男子が12名辞退しました。女子も7名辞退していて、他に武蔵高附属の男子10名、女子4名や、三鷹中等の男女各6名、桜修館の男子3名、女子8名も目立ちます。立川国際の男子が珍しく0でしたが、他校でも数名の辞退者が出ています。いずれも難関私立の併願者です。

なお、都立・区立全校で、新型コロナウイルス感染等で受検できなかった場合の「特例による検査」が2月25日に実施され、各校1~2名の定員に対して合計で49名が申込み、受検しました。高倍率の学校もありますが、難度のコメントは控えます。

◆ 神奈川県・千葉県

神奈川県には5校の公立一貫校があり、市立川崎高附属が男女合計定員、横浜市立の2校と県立の2校は男女別定員でしたが、県立は今回から男女合計定員に変更されました。また、今年もコロナ禍対応でグループワークは実施していません。5校合計の応募者数は3,704名で、昨年の3,972名から減っています。

県立の相模原中等は一昨年は男女とも応募者が減っていて、昨年は男子が一昨年並み、女子はやや減っていました。今年から男女合計での公表で、応募者は少し減っています。一昨年、昨年と女子がやや高い実質倍率でしたが、男子との差は小さく、高倍率ですか

ら難度に変化はなさそうです。平塚中等の応募者数は、女子の一昨年は前年並み、昨年は増えていました。男子は、一昨年は少し増加、昨年はまとまって増えていました。今年合計で減っていても昨年の反動が出ています。実質倍率は少し緩和したことから、女子は合計定員の恩恵で少し入り易くなったようですが、男子の難度はあまり変わっていないようです。

サイエンスフロンティア高附属は、一昨年は男子の応募者がやや減、女子もわずかですが減っていて、昨年は男女とも増加に転じました。今年男子が昨年並み、女子はやや減っています。高倍率校ですから女子も含めて難度に変化はなさそうです。横浜市立南高附属は、一昨年は男子の応募者がやや減少、女子は少し増えていて、昨年は男女とも増えていました。今年男女とも少し減っています。同校はもともと高倍率ですから、少々応募者が減っても難度に変化はなさそうです。同校は学区外として横浜市民以外の神奈川県民枠を設けていて、合格者の30%以内ですが、今年10名合格で、昨年、今年と減っています。

市立川崎高附属は、昨年全日普通科の募集が停止され、完全中高一貫になっていて、応募者数の男女別の内訳は未公表です。一昨年は応募者が少し減っていましたが、昨年、今年と前年並みが続いています。難度面は昨年とあまり変わっていないようです。

なお、県立・市立全校で、新型コロナウイルス感染等で受検できなかった場合の「特例による検査」が共同で2月23日に実施され、サイエンスフロンティア高附属以外の各校は申し込みがあり、合計15名でした。平塚中等と市立川崎高附属は合格者がなく、相模原中等と市立南高附属は各1名合格です。難度のコメントは控えます。

続いて千葉県です。県内公立一貫校3校の合計の応募者数は、昨年は一昨年より減っていましたが、今年は大きく増加しています。その原動力が市立稲毛国際です。昨年まで市立稲毛高附属として、高校募集も行われる中高一貫校でしたが、今年から学年進行で完全中高一貫校に改編され、高校募集の国際教養科を発展させる教育内容になります。同時に募集定員が倍増しました。このため、応募者が大きく増えたわけです。選抜も、県立と同様の2段階選抜に変更されました。応募者数は昨年の1.4倍に増加、1次は2.55倍、2次は2.01倍の実質倍率でした。適性検査の内容も変更さ

れています。難度面は今後の大手公開模試の結果を見る必要がありますが、出題は英語もあってやや難化、倍率面は1・2次合計では昨年より緩和していて、結局あまり変わっていないのかもしれませんが。

県立千葉は、昨年は男女とも応募者が減っていましたが、今年は男子が少し増えて、女子は少し減っています。女子は連続して減っていますが、難化が進みすぎたのかもしれませんが。難度面では1次の合格者数と2次の出席率から、昨年とあまり変わっていないようです。県立東葛飾は、昨年は男子の応募者が一昨年並み(厳密には微減)、女子は少し減っていて、今年は男女とも増加しました。1次は倍率が上がった分、少し難化したのかもしれませんが。2次は昨年並みでしょう。

◆ 埼玉県・栃木県

まず埼玉県から。県内4校合計の応募者数は昨年並みです。市立浦和は、昨年は男子の応募者が減って、女子は一昨年並み(厳密には微減)で、今年は男女とも応募者が増加しました。男子の増加が目立ちます。2段階選抜で、1次は市立大宮国際と併願できますが、2次は併願できません。1次合格者の2次受験者数は男女とも昨年並みの人数ですが、1次の応募者が増えた分、やや難化したようです。市立大宮国際中等は、昨年は開校時の人気一段落して男女とも応募者が減りましたが、今年は市立浦和と同様、男女とも増えました。市立浦和と違って、女子の増加が目立ちます。1次合格者の2次受験者数は同校も昨年並みで、同校も1次の応募者が増えた分、少し難化したようです。

昨年新設開校した川口市立高附属は、男女とも応募者が減っています。昨年は開校人気で、準備不足の受検生も目立っていましたが、今年は難度が受検生に知れ渡ったようで、準備不足の受検生が減りました。こうした状況ですから、難度は昨年とあまり変わっていないようです。県立の伊奈学園は、一昨年は応募者が増加、昨年は一昨年並み、今年は少し増えました。全体的に中学受験が拡大している影響でしょう。2次の欠席者が増えています。日程が1週間繰り上がり、他校併願者の欠席が増加したためです。同校によると、その分合格者の辞退が大きく減ったとのこと。難度面はあまり変わっていないようです。

続いて栃木県です。県内3校合計の応募者数は増えています。宇都宮東高附属は、昨年は男子の応募者が

減り、女子が少し増えていましたが、今年は女子が減って、男子もやや減っています。国立の宇都宮大附属と併せて検討している受検生が多く、宇都宮大附属は男子が減少、女子は増えていましたので、女子については両校を合わせれば人気に変化がないと言えそうです。男子は地域では高難度のこの両校が少し敬遠されたのかもしれませんが。実質倍率は少し下がったものの、入り易くなったというほどでなく、難度はあまり変わっていないようです。

佐野高附属は、昨年は男女とも応募者が減っていましたが、今年は男子が若干減ったものの、女子は大きく増えました。昨年は女子の減少が大きかったので、隔年的な変化です。男子は合格者が少し減り、その分女子の合格者が増えましたが、少し難化したのかもしれませんが。矢板東高附属は、一昨年まで男女とも応募者が少しずつ減っていて、昨年は男子が小幅の減少、女子はまとまって減っていました。今年は男子が昨年と同数の応募者数、女子は大きく増えています。女子は合格者が増えましたが、この影響で男子は合格者が絞られて、やや難化したようです。

◆ 茨城県

茨城県では公立高校再編の一環で、2020～2022年度で10校の公立一貫校を新設、従来からの3校と合わせて13校と、東京都を抜いて首都圏トップの学校数になります。今年は計画最後の2校が開校です。学校数の増加で、県全体で中学受験生が増えていて、各校合計の応募者数は今年も増加しています。まず、新設校から見ていきます。

水海道第一高附属、下妻第一高附属とも関東鉄道常総線沿線の学校で、沿線南部は私立の江戸川学園取手などがあって中学受験が広がっていて、沿線北部には一昨年以下館第一高附属が開校して、沿線全体で中学受験が活性化しています。両校とも女子の人気が高く、水海道第一高附属は男子が3.3倍、女子が4.25倍、下妻第一高附属は男子が2.6倍、女子が3.85倍でした。下妻第一高附属は下館第一高附属より少し高い難度、水海道第一はさらにやや高い難度だったようです。

既存校は県南部から見ていきます。県南の並木中等は、県内公立中高一貫校の第一号です。男子の応募者が減り、女子は少し増えました。昨年とは逆の動きです。通学圏では一昨年竜ヶ崎第一高附属が、昨年は土

浦第一高附属が開校したため、この2校とは受検生の流動が見られますが、もともと隔年現象が見られる学校で、進学実績に定評があることから、難度はあまり変わっていないようです。

竜ヶ崎第一高附属は、男子が昨年が続いて応募者が減っていて、女子は昨年が一昨年並みでしたが、今年は減っています。スーパー・サイエンス・ハイスクールに指定されていることもあって人気が高いのですが、難度が地域に浸透するにつれて、諦める受検生が増えてきたのでしょう。昨年よりやや入り易くなったようです。昨年開校の土浦第一高附属は公立トップ校の併設中学です。男子は応募者が増加、女子は減っていて、男女で人気の動向が違ってきます。女子は少し並木中等に受検生が流れたのかもしれませんが。しっかり準備した受検生も多く、難度は昨年並みだったようです。

県西部の古河中等は、県内の他の公立一貫校とは通学圏があまり重なりません。一昨年までは応募者が少しずつ増えていましたが、昨年は男子が減少、女子もやや減っていました。今年は厳密には男女ともやや減ったものの、昨年並みの応募者数でした。地域的には埼玉県や栃木県に近く、特に埼玉県の中学受験の影響を受けていますが、今年は昨年並みの人気を保ったようです。難度面では昨年並みでしょう。開校3年目の下館第一高附属は、昨年は男子の応募者がやや減り、女子は一昨年並みでしたが、今年は男女とも少し減りました。関東鉄道常総線の北の終点が下館ですから、沿線に下妻第一高附属と水海道第一高附属が開校、受検生がそちらに流れたのでしょう。少し入り易くなったかもしれません。

水戸周辺から県北部にかけてでは、土浦第一と並んで県内トップ校の水戸第一が2年目の入学者選抜でした。女子は応募者が増加、男子もやや増えていて、高い人気です。しっかり準備した受検生も多く、やや難化したようです。同じく2年目の勝田中等は、昨年は

同じエリアの水戸第一の注目度の方が高く、予想外に低い倍率でしたが、2年目で認知度が上がってきたようで、男女とも応募者が増えて、特に男子の増加が目立ちます。昨年より少し難化したでしょう。

日立第一高附属は県内公立一貫校で3番目にスタートした学校です。昨年は水戸第一高附属開校の影響で、男女とも応募者が減りましたが、今年は女子が厳密には若干減ったものの、ほぼ昨年並み、男子は増加しました。少し難化したかもしれません。開校3年目の太田第一高附属は、一昨年の開校時は不合格者が出ず、昨年は男女とも応募者が増えましたが、今年は反動もあって応募者が男女とも少し減りました。不合格者は出ています。中高一貫校を選ぶなら日立第一高附属や私立の茨城キリスト教学園を選ぶ受検生が見られる地域で、なかなか学校の認知度が上がらないようです。難度面では入り易くなっています。

東部の鹿島高附属と鉾田第一高附属は両校とも開校3年目です。昨年は両校とも応募者が増えていましたが、今年は鉾田第一高附属の応募者が男子は昨年並み、女子はやや減ったものの、昨年とあまり変わらない応募者数でした。鹿島高附属は男女とも応募者が減っていて、特に男子の減少が目立ちます。私立の清真学園に流れた受検生もいたようです。鉾田第一高附属は昨年とあまり変わらない難度だったようですが、鹿島高附属は少し入り易くなっています。

◆ 寮制校の東京入試

公立中高一貫校でも寮制入試を行う学校があります。鹿児島県立楠隼(なんしゅん)中学校で、全寮制公立中高一貫男子校です。東京会場だけの応募者数は未公表ですが、県外各会場合計の応募者数は少し増えました。やや難化したかもしれません。

☆ 都立白鷗高附属の特別枠の内訳

分野	募集定員	応募者数		受検者数		合格者数	
		男	女	男	女	男	女
囲碁・将棋	6名程度	2	0	0	0	0	0
邦楽		0	0	0	0	0	0
邦舞・演劇		1	3	0	2	0	2